

【主な展示作品】

【桃山陶 革新的デザイン】



① 黒織部茶碗

美濃窯

安土桃山時代（16 世紀後半～17 世紀初頭）

加藤舜陶氏寄贈

黒織部は、焼成中に窯から引き出して急冷させる「引き出し黒」の技法により、鉄釉を漆黒に発色させた陶器です。これは瀬戸黒や織部黒などにも共通する技法です。

本作品のような黒織部は、江戸時代初期に唐津から導入された「連房式登窯^{れんぼうしきのぼりがま}」で量産されました。茶碗は多くが沓形^{くつがた}で、黒釉の一部を窓抜きにして絵を描いたり、黒釉を掻き落として織部独特の幾何学文様や花文様を表したりしています。この技法により、繊細な意匠が可能となりました。

【名物茶入 六歌仙の風格】



② 織部茶入 銘「喜撰」

美濃窯

安土桃山時代（16 世紀後半～17 世紀初頭）

胴部にはロクロ目が残り、大胆な縦のへら削りや鉄釉の流し掛け（なだれ）が施され、正面には細長い文様が描かれています。底部は内側へ削り込んだ揚底で、中央に「イ」の刻銘があるのが特徴です。

銘の「喜撰」は、遠州流十二世家元の小堀宗慶^{こぼりそうけい}により、六歌仙の一人である喜撰法師にちなんで命銘されたものと考えられています。

【大胆な造形と備前特有の窯変に注目】



③ 耳付水指

備前窯

安土桃山時代（16 世紀後半～17 世紀初頭）

備前焼は、15 世紀後半に信楽焼と共に茶の湯に取り入れられた国産陶器です。本作品は桃山時代の天正年間（1573～1592）後期頃の流行を反映した茶道具です。ロクロ成形後に歪みを加え、大胆なへら目や備前特有の赤褐色の窯変の景色が見える力強い造形が見どころです。わび茶の精神を体現した作風は、備前が早くから本格的な茶道具生産に取り組んでいたことを伝えています。

【近代一宮市の数寄者 森家の煎茶道具】



④ 煎茶道具一式（棚飾り）
江戸時代・明清時代（17～19 世紀）
森克彦氏寄贈

一宮市の繊維産業の歴史を語る上で欠かせない老舗企業である森林商店（現在のモリリン株式会社）の森 林兵衛（1855～1945）が催した煎茶会の図録『竹翁金婚 祝 賀会図録』の煎茶席を再現し、煎茶流行期の最末期の様相を伝えます。

中国明清時代の名品を中心とした、煎茶の棚飾りとして紹介します。

【煎茶人の憧れ、ぐりんだま】



⑤ 梨皮泥具輪珠茶 銚
宜興窯・中国
清時代後期（18～19 世紀）
森克彦氏寄贈

中国を代表する茶銚の産地、宜興窯で制作された作品です。粘土板を筒状に巻いて成形し、木製工具で叩いて造形する「打身筒（パンパン技法）」で作られています。朱泥の素地に異色の土粉を混ぜ、梨の皮のような斑紋を呈する「梨皮泥」が特徴です。球形の小形で、短い注口と笠形の蓋を持つこの形式は「俱輪珠」と呼ばれ珍重されました。専用の桐箱と複数の仕覆用の箱が仕立てられており、大切に愛玩されていたことがうかがえます。

【至福の一杯、天に昇る】



⑥ 青花火馬文茗碗
景德鎮窯・中国
明末清初（17 世紀）
森克彦氏寄贈

中国の青花（染付）技法による茗碗で、五客揃いの品です。器の口縁部と高台には圈線が施され、胴部には飛馬文、飛雲文、点文が染付で描かれています。高台の裏には「大明成化年製」の銘が入っています。くり抜きの桐箱と仕覆が付属している、かつて備前岡山藩八代藩主である池田慶政公（1823～1893）が所蔵していた貴重な作品です。

【古伊万里風の人気シリーズ】



⑦ ティーセット《ジャパン》
ロイヤルクラウンダービー イギリス
20 世紀

1748 年に創業したダービー社は、チェルシーに続く英国磁器の中心地として発展した名窯です。1775 年にジョージ 3 世から「クラウン」、1890 年にヴィクトリア女王から「ロイヤル」の勅許を賜り、英国で唯一これら二つの称号を冠しています。最大の特徴は、日本の伊万里焼（金襴手）の影響を色濃く受けたデザインです。マイセンの柿右衛門写しと並び称されるこの様式は「JAPAN」の名で知られ、200 年以上にわたり同社を象徴するシリーズとして世界中で愛され続けています。

【日本由来のインドの花】



⑧ ティーセット《インドの花》
ヘレンド ハンガリー
デザイン：1867 年
製作：20 世紀

約 200 年の歴史を持つヘレンドは、万国博覧会の出品などにより、ヨーロッパ各国王室におけるコレクションのひとつになっています。

フランス・ナポレオン 3 世の皇妃ウージェニーは、1867 年のパリ万博で日本の柿右衛門写しである「インドの花」を見出し、それを外交の舞台で使用することで、ヘレンドを一流の窯として世界に知らしめました。

日本の磁器はオランダ東インド会社を通じてヨーロッパに運ばれていたため、「インド」の名が冠されています。

※広報用の高精細画像につきましては、愛知県陶磁美術館担当までお問い合わせください。